

## V 自然科学的分析

### 有本遺跡B地区出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白 石 純

#### 1. 分析の目的

蛍光X線分析法により、有本遺跡B地区出土の弥生時代後期後半の壺・壺・高壺・器台および津山市内の弥生、古墳時代の土器と胎土を理化学的に比較し、差異について検討した。

#### 2. 分析結果

分析方法、試料調整などは、現在までに実施している方法である<sup>(1)</sup>。

分析試料は第1表に掲載した有本遺跡B地区、男戸嶋古墳、日上天王山古墳、中山遺跡の土器である。

分析の結果、K、Ca、Sr、Rbの元素に顕著な差がみられることから、これらの元素比をとりX-Y散布図から検討した。

第1・2図の散布図は、有本遺跡B地区、有本古墳群<sup>(2)</sup>、男戸嶋古墳、美和山古墳群<sup>(3)</sup>、一貫東1号墳<sup>(4)</sup>、中山遺跡（岡山県落合町）出土の土器を比較した。

有本遺跡B地区出土の土器は、器種に関係なくほぼ一つにまとまる。ただ、試料番号11の壺が1点離れて分布した。また、有本古墳群出土土器も一つにまとまり有本遺跡B地区の土器群とほぼ分布域が同じである。有本遺跡B地区的特殊器台、中山遺跡、一貫東1号墳、日上天王山古墳の供献土器は、有本遺跡B地区、有本古墳群、美和山古墳群のグループから大きく離れて個々の遺跡ごとにまとまる傾向にある。また、日上天王山古墳と一貫東1号墳の土器がほぼ同じ胎土であることが推測された。

第3・4図は、時期により胎土に差異があるかどうか検討した。この結果、時期ごとに差異があるよりも各遺跡ごとに差がみられ大きく3つのグループに分類できる。それは、有本遺跡B地区、有本古墳群、近長丸山1・2号墳<sup>(5)</sup>と京免遺跡<sup>(6)</sup>・大田十二社遺跡<sup>(7)</sup>と男戸嶋古墳の3つである。

#### 3.まとめ

津山市内および周辺の各遺跡から出土した弥生後期から古墳時代前半の土器を胎土分析から比較した。そして、前記したような事実が判明したが、以上の事柄を簡単にまとめると

- (1) 有本遺跡、有本古墳群出土の土器は、ほぼ一つにまとまり胎土的に差異がほとんどみられなかった。また、これらの分析域にも美和山古墳群の埴輪も分布している。
- (2) 有本遺跡B地区、中山遺跡、日上天王山古墳、一貫東1号墳の供献土器である特殊器台などの土器は、他の遺跡資料とは明確に識別され、各遺跡ごとにまとまって分布した。また、日上天王山古墳と一貫東1号墳の土器は胎土的に同じ分析結果となった。しかし、分析点数があまりにも少なく点数を増やして再検討を要する。
- (3) 津山市内の各遺跡を時期ごとに差異がみられるか検討したが時期差はみられず、むしろ地域差が関係しているようで、今回の分析資料では三つのグループに分類できた。有本遺跡B地区、有本古墳群、近長丸山1・2号墳<sup>(5)</sup>（Aグループ）京免遺跡<sup>(6)</sup>・大田十二社遺跡<sup>(7)</sup>（Bグループ）

と男戸島古墳（C グループ）である。これらの地域を地質的な観点からみると、A グループの地質基盤は黒色千枚岩および千枚岩質粘板岩、B グループの地質は疊岩・砂岩および泥岩、C グループは A グループと同じ地質基盤から構成されている<sup>(8)</sup>。このように A と B グループは、遺跡の立地する地質基盤が異なっていることから、遺跡周辺で上器制作の粘土を採集した場合、差が出ることが予想される。しかし、C グループである男戸島古墳は、A グループと同じ基盤であり、地質基盤が同じであれば胎土の同じという結果にならなかった。このことは、使用された粘土に混和剤（砂粒など）入れられたことが十分考えられる。また、今回の分析では分析した遺跡の数も少なく遺跡数を増やして前記したような傾向がみられるかどうか再検討したい。

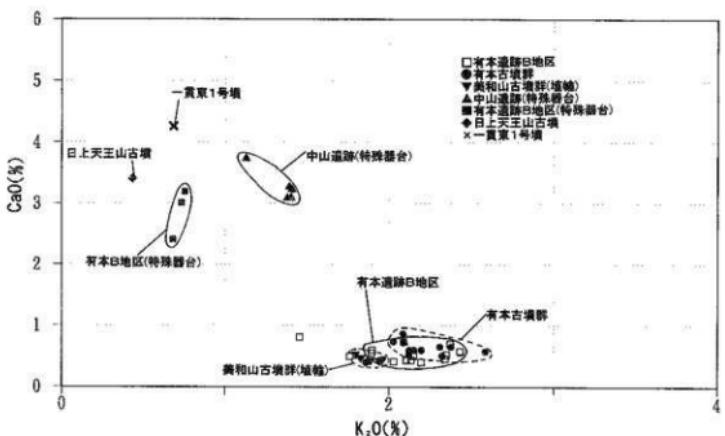
この分析を実施するにあたり、津山市教育委員会、落合町教育委員会の職員の方々には御教示・資料提供を頂いた。記して感謝いたします。

（註）

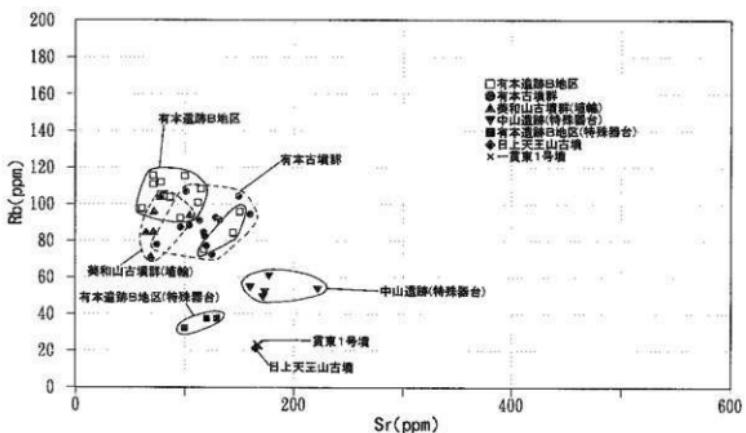
- (1)白石 純「螢光 X 線による考古学遺物（石器・土器）の化学的分析（III）」『自然科学研究所研究報告13号』岡山理科大学1987.
- (2)白石 純「有本古墳群出土土器の胎土分析」『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第59集 1997.
- (3)中山俊紀「史跡美和山古墳群保存整備事業報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第42集 1992.  
白石 純「河辺上原遺跡出土須恵器・埴輪の胎土分析」『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第54集 1994.
- (4)濱 哲夫「『貴東遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第13集 1992.
- (5)小野利幸「近長丸山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第41集 1992.
- (6)中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第11集 1982.
- (7)河本 清・中山俊紀・安川豊史・行川裕美「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第10集 1981.
- (8)地質調査所「日本地質図体系 中国・四国地方」朝倉書店

第1表 有本遺跡B地区出土十器の分析値（%）ただし、Sr, Rb は ppm

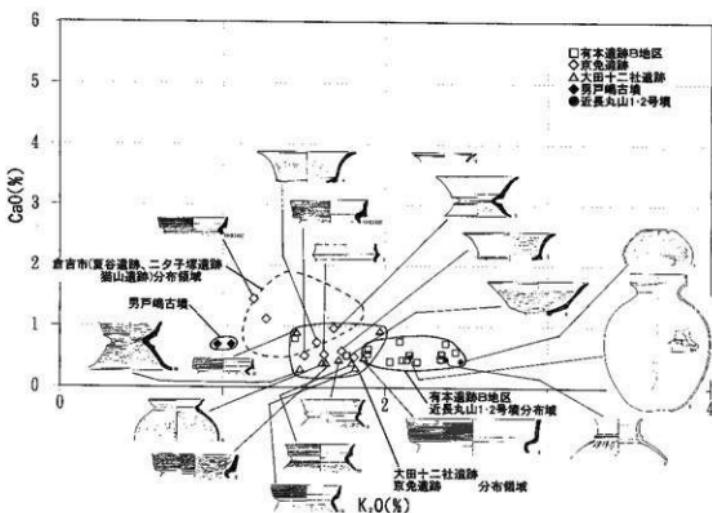
番号	遺跡名	地区	器種	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb	報告書図番号
1	有本遺跡	B地区下器種2	壺	2.35	6.68	63.21	1.01	16.94	0.52	99	115	第64図2
2	有本遺跡	B地区上器種3	壺	2.03	4.15	65.10	1.11	18.74	0.41	77	105	第64図3
3	有本遺跡	B地区下器種4	壺	2.15	6.91	66.09	0.90	16.13	0.52	86	103	第65図2
4	有本遺跡	B地区上器種5	壺	1.89	6.58	62.81	1.15	17.59	0.61	117	75	第34図2
5	有本遺跡	B地区下器種5	高杯	2.37	4.44	56.19	1.13	21.71	0.69	111	101	第34図1
6	有本遺跡	B地区下器種8	壺	2.09	3.36	66.71	1.13	18.36	0.74	150	96	第46図2
7	有本遺跡	B地区下器種10	壺	1.89	6.58	70.73	0.98	14.47	0.55	95	92	第84図3
8	有本遺跡	B地区下器種10	壺	2.43	5.20	65.26	0.96	18.51	0.57	114	108	第84図4
9	有本遺跡	B地区上器種1	壺	2.13	9.48	58.95	1.16	17.02	0.43	60	97	第55図1
10	有本遺跡	B地区下器種9	壺	1.76	10.26	62.03	1.23	14.96	0.51	80	104	第78図3
11	有本遺跡	B地区上器種7	壺	1.45	7.58	60.30	0.99	17.51	0.81	143	84	第46図1
12	有本遺跡	B地区窓3	器台	2.31	4.44	65.26	1.28	17.71	0.14	77	112	第33図3
13	有本遺跡	B地区窓3	器台	2.20	4.36	63.82	1.30	17.00	0.40	70	111	第33図5
14	有本遺跡	B地区上器種6	壺	2.10	4.50	61.06	1.16	20.01	0.44	70	115	第33図1
15	有本遺跡	B地区K	特殊器台	0.75	14.46	42.22	1.36	20.51	3.21	129	37	第83図
16	有本遺跡	B地区	特殊器台	0.73	14.08	41.15	1.31	21.62	3.02	120	37	第83図
17	有本遺跡	B地区	特殊器台	0.68	13.46	40.80	1.33	23.63	2.42	100	32	第83図
18	男戸島古墳	埴輪外土壙	壺	0.96	7.32	53.13	1.03	23.84	0.68	133	50	第103図2
19	男戸島古墳	埴輪外土壙	高杯	1.05	6.01	60.73	1.10	19.22	0.70	120	61	第103図1
20	月上千木山古墳	第1レシソチ15	壺	0.42	11.75	39.37	1.08	23.07	3.41	164	21	
21	中山遺跡13区	第4グループ上壙155		1.38	11.10	67.89	1.24	19.58	3.10	159	54	
22	中山遺跡	第4グループ下壙155		1.40	11.26	45.05	1.29	20.07	3.24	176	61	
23	中山遺跡	第4グループ上壙155		1.38	11.21	45.50	1.25	20.25	3.29	173	52	
24	中山遺跡	第4グループ下壙155		1.39	11.24	43.53	1.26	20.42	3.11	172	49	
25	中山遺跡	第4グループ下壙155		1.12	11.19	43.93	1.03	20.30	3.76	222	53	



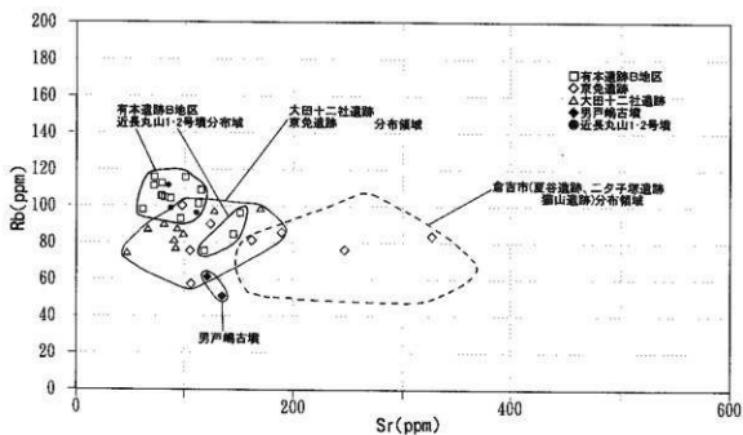
第1図 有本遺跡B地区および洋山市内各遺跡との比較



第2図 有本遺跡B地区および津山市内各遺跡との比較



第3図 津山市内各遺跡の時期、地域による比較



第4図 津山市内各遺跡の時期、地域による比較

## VI まとめ

### 1. 有本遺跡の時期と特質について

#### (1) 弥生時代の集落について

有本遺跡ではA地区で住居跡4軒、建物跡7軒、貯蔵穴、溝などを確認した。住居は4軒と少なく散在的に分布し、住居跡1以外は建て替えもない。住居の規模も1が直径7.4mで最大でその他は4が6.2m、2・3が3.1・3.7mである。このように大形住居と小形住居数軒で構成される集落は、津山地方で一般的な集落構造である。例えば後期前半の津山市大畠遺跡（註1）や小原遺跡（註2）などで良好な事例が検出されている。住居跡1にしか建て替えが見られないため、これら集落は比較的短期間に営まれた単位的な集落と考えられる。

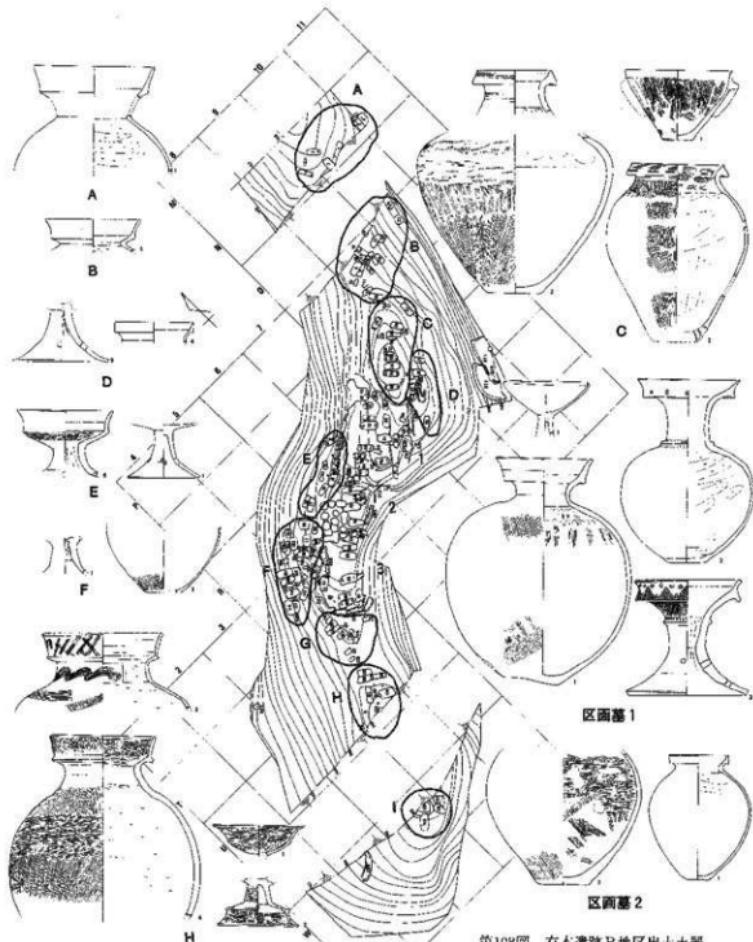
次に時期であるが出土した土器を検討してみると、壺の口縁は円線が見られるものの、ほとんど退化しているものの中には見られ、高杯も短脚である。これらの特徴などから住居跡1・3、溝1・3、土塙1などは、既存の編年における藤田編年のⅢ期（註3）、津山市大田十二社遺跡の3式（註4）にほぼ併行するものと考えられる。また、住居跡2の壺や柱穴1・2の高杯などはやや後出のⅣ期、4式併行である。よって、若干時期幅はあるが、おおむね弥生時代の後期後半頃に営まれた集落である。

また、B地区で墳墓群以外に段状遺構1・2と上器棺11を検出している。段状遺構は出土した土器の内、第89図1の器台の特徴は津山市ビャコ谷遺跡（註5）に似ており、おおよそ中期の後半頃である。土器棺11についてはかなり大きめの土器であるが口縁部と底部が存在しない。内外面には丁寧にハケを施している。そのため時期は明瞭でないが、少なくとも段状遺構2が埋まる早い段階で埋設されているため、ほぼこの段状遺構に近接した時期と考えられる。この上器棺11の内部から大きめの石が2個出土し、その出土状況から後から流入したものとは考えられない。このように上器棺の内部から石の出土した例は有本遺跡B地区の上器棺10からも4個の小礫が出土している。土器棺10の場合は4個の小礫は磨かれた痕跡がある。比較資料があまり無く、このような石の性格については現段階では明瞭でない。中期の遺構としては段状遺構を検出しただけで、住居などが伴わないとどういったような集落構成であったかは明確でないが、周辺にはほぼ同時期の男戸崎遺跡（註6）があり、この遺跡との関連が考えられる。

#### (2) 弥生時代の墳墓群について

B地区的墳墓群は丘陵の尾根筋に沿って明瞭に区画をもつもの3基と、その内外に上塙墓が140基検出された。区画を施す方法として石を使用する列石と溝の2種類があり、いずれも方形（長方形）に区画している。列石は区画墓1の北西側にあり、平らな石を立てることなく敷き並べている。また、区画墓3は溝6の一辺に沿って石が並べられている。石で区画を施した例は津山市三毛ヶ池1号上塙墓（註7）に見られ、上部を削平されているものの、方形ないしは椿円形の片方に張り出しのついた形状で、そのくびれ部分の斜面に石を貼りつけている。これは本例とは若干石の置き方が異なっている。本例の区画墓1のように石を倒して並べる例は周辺地域では見られない。例えば石を立てているものとしては哲西町西江遺跡2号方形台状墓（註8）などがある。また、区画墓3のように区画を構によって拡張している可能性のものとして、落合町中山遺跡の3・4号墓（註9）がある。この中山遺跡は4基の区画墓があり互いに溝を共有したり、大小2種類の区画墓の存在など本区画墓群と様相が似通っている。

本墳墓群の土塙墓については墓壇の規模、小口溝の有無、枕石の有無、墓壇の尾根線に対する主軸方



第108図 有本遺跡B地区出土土器

区分	基盤底面積				小口溝		粒 石		半輪と層構造との関係		土器種	附 装 品	
	大	中	小	不明	有	無	有	無	平行	直交	斜交	不明	
区画基1(2基)	2	8	4	9	15	8	0	23	6	15	2	0	2
区画基2(2基)	1	1	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	2
区画基3(13基)	3	4	1	5	6	7	0	13	3	6	1	1	無し
A群(7基)	0	3	2	2	0	7	4	3	3	1	3	0	1
B群(18基)	0	5	8	5	1	17	1	17	7	5	5	1	0
C群(11基)	0	8	2	1	5	6	0	11	0	9	2	0	3
D群(9基)	0	5	2	2	2	7	0	9	5	2	1	1	0
E群(9基)	0	7	2	0	4	5	0	9	7	0	2	0	無し
F群(26基)	0	12	8	6	0	26	0	26	12	10	4	0	1
G群(10基)	0	4	6	0	2	8	0	10	0	6	4	0	0
H群(8基)	1	3	0	4	0	8	2	7	6	1	5	0	2
I群(4基)	0	0	0	4	0	4	0	4	1	1	2	0	0
合計(140基)	7	60	35	38	35	105	7	133	45	64	26	5	10

第7表 土壌区分類表(基盤底面積の大は全長2.5m以上、中は2m前後、小は1m前後を表す)

向の4つの項目で分類し述べてきた。各グループごとに墓壙の床面の規模で比較してみると、分布状況から明確なグルーピングは難しいが、大まかに全長が1m前後、2m前後、2.5m以上の3種類(小・中・大)に分類できる(第7表)。その中で大形(2.5m以上)は区画墓1~3に多くが存在する。また、小口溝のあるもので、小口溝の幅と両小口間の距離で分布を見ると、これも明確には分類できないが、だいたい3種類(小口間距離2m・1.5m・1m前後)に分類できそうである。さらに墓壙の主軸を見るとな尾根線に直交するもの、平行するもの、斜交するものの3種類に分類でき、全体の数からすると直交するものが多い(第7表)。この中で小口溝と枕石の有無に注目して分布を見てみると、南から北へ小口溝の無しのグループ(F~I群)→小口溝有り無しの共存グループ(区画墓1~3、C~E群)→小口溝無しのグループ(B群)→枕石有りのグループ(A群)→有本古墳群(枕石有り)と配置されている事が伺える。さらに区画墓1では内部の土壙墓の半数以上が小口溝をもち、区画墓2は小口溝をもたず、区画墓3は小口溝をもつものともないものの2群に別れる。次にこれら属性の違いが時期的なものなのか集団の違いなのか、出土遺物から若干検討してみたい。

出土遺物としては土器棺が10基墓域内に散在的に分布し、G・H群では特殊器台、区画墓1の溝3では供獻された七器群が出土している。これら土器の中には埋葬ごとに供獻されているものもあり、そのため若干の時期幅が存在するものもあると考えられ、個々の所属時期を決定する事は難しい。その中で土器棺を見てみるとA群で1基、C群で3基、F群で1基、H群で1基、区画墓1で2基、区画墓2で2基検出されている。この土器棺は残りがあまりよくないが、蓋との組み合わせで分類すると、壺(甕)のみで土器による蓋のないもの、壺(甕)を高杯で蓋にしているもの、壺を鉢で蓋にしているものの3種類が確認できる。この中で、一番古い時期はC群の土器棺2と4で壺や甕は口縁や胴部の特徴などから藤田編年II期、大田十二社2式(以下形式名のみ明記)に併行するものと考えられる。また、同じC群の土器棺3や区画墓2の上器棺7・8はやや新しい3式、III期併行である。また、一番新しいのは特殊器台の出土しているH群の土器棺10で、蓋にしていた高杯がやや古い様相ではあるが、壺はその特徴からIV期併行である。この様に土器棺の場合再利用等時期の異なるものを組み合わせているものも見られる。A群の土器棺1は、壺の口縁の特徴や胎上がり異なり、IV期よりも後出の可能性が考えられるが、隣接して存在する有本7号墳の土器棺(註10)と比べた場合、この土器棺1とはよくにているものの、胴部内面の構造が異なっている。いずれにしても近い時期の可能性が考えられる。次に各グループを見てみると区画墓1の溝2の甕は口縁がくの字に外反しその特徴からIV期併行、溝3の上層で出土した器台と甕は一括遺物であり、器台については変遷の研究(註11)があり、これに照らすとほぼIII期併行以降は見られなくなる器種である。そのためこれら一括遺物はほぼIII期併行と考えられる。また、土器棺6の甕はこの溝が埋まる前に埋設されているが、胴部の肩が張っておりほぼIII期の範疇である。また、土壙墓52・53などから出土した土器もほぼIII~IV期併行であり、このある程度の時間幅が区画墓1の所属時期と考えられる。区画墓2も土器棺7・8はIII期併行で、ほぼ区画墓1と同時期につくられたものである。区画墓3については出土遺物はほとんど無く、時期については不明である。A群はほとんど出土土器は無いが、土器棺1の甕からIV期併行以降、B群は土壙墓23の甕や高杯の特徴からIV期併行、C群は土器棺がII~III期併行であり、その他の土器もほぼIII期の範疇である。D・E群はIII期併行、F群は出土遺物がほとんど無く明瞭でないが、高杯が短脚である事からIV期併行の可能性が考えられる。G・I群については出土遺物がなく時期決定はできない。また、H群は上器棺10の特徴や特殊器台の出土からIV期併行である。

以上から推測すれば、本集団墓地の丘陵最高所のC群に最初に土壙墓群及び土器棺が築かれ、これについては明瞭な区画は現状では存在しないが、北西斜面から転落したものが多数存在する事から、本来は区画墓1のように石で区画されていた可能性が考えられる。その後南側に続く区画墓1・2やD・E群、続いてF・G群が造られる。このH群についても最高所に道が通り削られているため定かではないが、特殊器台が出土している事から、区画されていた可能性もある。その後北側にB群、最後にA群が造られ本墓地は造られなくなる。これを先の土壙墓の分類にあてはめると、最初は小口溝のある土壙墓（木棺）が主として使用され、その後は小口溝無の両者が共存する形となり、最後は枕石を使用するものへと移行していくようである。ただこの小口溝の有無の両者が共存するものの、これが時期的なものか集団の違いによるものかは、土器の細分はできず即断できない。ただ区画墓については、小口溝有る無しの両者が共存するものと、無いものの2者があり、特に前者の場合は小口溝があるものがその中心的な所に作られている。また、枕石の使用は北側に続く有本古墳群で見られる特徴であり、その意味から推測すれば、A群は主軸の向きにばらつきがあり、もしかすると古墳に埋葬されなかつた人達の墓かもしれない。

次に美作地方の墳墓の変遷を見てみると、中期では津山市三毛ヶ池1号下層墓（註7）があり、方形の区画墓の中に34基の土壙墓があり、その内30基に小口溝がある。小口溝を有するものが大半を占め両者が共存する。後期では津山市下道山遺跡（註12）や三毛ヶ池1号上層墓（註7）があり前者は区画をもつものともたないものが存在し、区画墓はほとんどが小口溝をもち、区画をもたない土壙墓群も大半が小口溝をもつものである。後者は区画をもち区画内に4基の土壙墓が検出された。かなり削平を受けているため土壙墓の実数は明瞭でないが、その中でも中心の埋葬施設は小口溝をもっており、両者が共存するようである。これらはI～II期併行である。また、II期併行として才ノ船遺跡（註13）があり、区画墓で7基の土壙墓の内6基に小口溝が存在する。そして、次のIII～IV期併行にあたるのが今回紹介した有本遺跡の墳墓群である。

以上を簡単に整理すると美作地方、特に津山市周辺においては、中期の中頃から後期のⅢ期ないしはⅣ期にかけては、小口溝をもつものともたないものの両者が存在し、特にⅢ期までの段階では小口溝をもつものの方が数からして多く、区画墓の埋葬施設に多様され、その内中心的な埋葬施設に使用されるものが多い。また、枕石の出現はⅣ期の段階頃で、この事はほぼ落合町中山遺跡（註9）でも推測されるが、この遺跡は小口溝をもたないもので構成され、中には礫を用いた礫櫛墓も存在する。この小口溝をもたないのが地域的なものか、あるいはこの時期が小口溝の終焉を意味する可能性も指摘できる。また、県南の御津町みそのお遺跡（註14）は後期の初頭から連続と墳墓がつくられており、枕石の出現はおよそⅢ期併行の終わりの段階であり、ほぼ津山の様相と似ている。よってこの枕石の出現は時期的な指標となるものと考えられ、細かな時期については再度検討する必要がある。さらに、Ⅲ期以降は特殊器台が伴う遺跡が美作地方でも増えてきている。この事は吉備地方の南部との関連が考えられるが、美作地方の出土は、いわゆる墳丘墓に埋葬された首長に伴うものではなく、集団墓に伴うと判断されるものがほとんどである。今回の有本遺跡の場合も区画墓に伴うものかどうかは明瞭でないが、集団墓に伴う可能性の方が大きい。このように特殊器台に対する取り扱いの違いは、特殊器台出現以前の器台の在り方が大きく起因しているものと推測される。この事は、美作地方では後期の前半の墳墓に器台が供獻されているものが多く（例えば才ノ船遺跡）、逆に県南地域ではこのような類例はほとんど知られていない。そしてこのような差異が生じる事は美作地方は個々の世帯共同体が祭祀そのものの単位である

のに対し、県南は複数の世帯共同体が結合し集落が形成され、そのため集落内での祭祀の際に器台を使用していたが、このような集団関係の変化の中で首長権の拡大が行われ、他とは隔絶した墳丘墓が造営されたためと解釈されている（註11）。このように墳墓に器台を使用する風習が、その後の美作地方では特殊器台が本来の目的から逸脱してしまい、集団墓に伴うといった出土状況に大きく影響しているのであろう。また、県南の事例から特殊器台をもつ墳墓群ともたない墳墓群には共通の觀念（主軸方向など）のもとに埋葬されながらも、立地面や墓壇規模に差異が見られ、これを階層の違いと解釈しているものもある（註15）。少なくとも有本遺跡では特殊器台の有無により、墓壇規模の違いなどは明瞭には読み取れないのが現状である。しかし、このように集団墓地に県南地域の墳丘墓で出土する、首長の葬送儀礼祭祀に使用されたと考えられる特殊器台が伴う事実から、少なくとも美作地方においてもこれを得るだけの権力の存在が伺える。そのため、複数の集団が血縁関係以外にも結合し、あるいは系譜上の再編などがおこなわれ、いわゆる首長を選出するだけの生活基盤が整いつつあったものと考えられる。尚、本墳墓群を形成したと考えられる集落は、有本遺跡A地区の他、南側にある荒神岳遺跡（註6）などが考えられる。

### （3）弥生時代の出土遺物について

#### （特殊器台）

特殊器台はG・H群の2地点（A・B地点）で採集されたもので原位置を保っているものはない。この両者は接合しないため少なくとも複数個体存在していた可能性が考えられる。いずれも破片のため全體像や文様構成は明確ではないが、文様のなかにS字の文様の外に綾杉文に似たものがあり、これは先の中山遺跡でも見られるものである。これら文様の内綾杉文については、文様構成が明確でなく、逆にS字文様の方が破片も多い。このS字の文様構成から、いわゆる向木見型（註16）で、宇垣氏の編年の中3型式（註17）の範疇で解釈される。よく似た文様構成は山陽町便木山遺跡のA類型（註18）、真備町西山遺跡（註19）などがある。本遺跡の出土地点は大きく削られているため明確でないが、特殊壺らしき破片は出土していない。この特殊器台と特殊壺のセット関係の研究では、この型式の段階は特殊器台のみ出土する例が多い（註20）。また、船上分析では他の土器とは明らかに異なる結果がでたが、分析資料が少なく明瞭なグループわけはできていない（第V章参照）。ちなみに津山市内の特殊器台の出土は丸山遺跡（註21）、上原遺跡（註22）、下道山遺跡（註23）、椎現山遺跡（註24）に統計5例目で、ほとんどが集団墓地に伴うものである。この内丸山遺跡、上原遺跡は本遺跡とほぼ同型式である。

#### （ガラス製管玉）

ガラス製の管玉が土壙墓49から17点、土壙墓12から1点出土している。その内前者の管玉は、ガラスをらせん状に巻き上げ、それをほぼ2cm間隔に切段して研磨して完成させている。この事は個々の管玉に継ぎ模様が見られる事からも推測できる。このガラスの成分は分析の結果鉛バリウムシリカガラスである（註25）。これについてはこれら材料の開拓と製作の技術面からくる製作地などが問題となる。まず国内で弥生時代のガラス管玉の出土地を見ると東は静岡県、西は長崎県の約42遺跡群が知られている（註26）。また、これらガラス管玉は、形態から2種類（エンタシス型・筒型）に分類され、さらにこの筒型は大きさから3種類（極細身小型・細身小型・太身中型）に分類される（註27）。本例はこの筒型・太身中型である。本例と同様なものとしては、鳥取県門上谷1号墓（註27、註28）、京都府大山墳群（註27、註29）に見られる。前者は長辺24m、短辺18mの区画墓で26基の木棺墓が検出され、その内の第1主体から14個、第12主体から2個のガラス製管玉が出土している。本例が長さ20~23mm、径6~7mm、

この門上谷が長さ25.6~33.5、径7~8.6mmであり本例と比べると長さ径とも一回り大きい。製作技法は同様な巻き技法が見られ、成分もバリウムを含む鉛ガラスである。後者は3号墓から1点、8号墓から完形品10点などが出土し、その内8号墓の例は本例よりは長さは長いが、技法は巻技法である。成分は鉛ガラスであるもののバリウムは含んでいない。以上、長さや成分は若干異なるものの、技法的には同じ巻き技法であるガラス製管玉が山陰地方で見られる。例えば県南の吉備地方では、ガラス製管玉の出土例はほとんどなく、あっても技法や大きさが異なっている（註30）。この事から本例は九州から山陰地方を媒介として流入してきた可能性が大きい。また、鉛バリウムシリカガラスの製品は、日本では紀元前2世紀頃から北九州を中心に流通をはじめ、中国で作られたものが伝えられ、あるいは再加工されたものと考えられており（註31）、これら製作地の問題、流通経路等については、分析結果等をふまえ再度検討したい。

#### （鉄製品）

弥生時代の鉄製品の内鉄鏃2点、刀子状鉄製品1点が出土している。鉄鏃は上墳墓12と39から1点ずつ出土している。いずれも無茎であるが大きさは両者異なっている。同様な形態のものとしては、落合町中山遺跡（註9）、御津町みそのお遺跡（註14）で出土している。両者とも弥生時代の墳墓群で前者は特殊器台も出土し、前述したように時期的にもよく似た墳墓群である。これら鉄鏃は大村氏（註32）の弥生時代鉄鏃の変遷によれば第二段階、畿内の第五様式・庄内式併行段階に相当し、先の土器からの時代考証とほぼ一致する。また、この段階には古墳時代前期の基本的な諸形式が認められる。この時期は各地に個別の墳墓が造られ地域間に抗争があったとすれば、本例がその犠牲者の可能性も捨て切れない。と言うのは、比較的小規模の土塚墓からこれら鉄鏃が出土し、副葬品とは考えにくい点からである。

また、刀子状の鉄製品がA地区の住居跡1から出土している。これは刃の一部が欠損しているため全体の形態は明瞭でないが、片刃のようでありヤリガンナではなさそうである。茎の部分に木質が残存している事から、柄の部分に装着して使用されたものである。刀子の類例は県内で4例あり、いずれも県南地域での出土である（註33）。

#### （スタンプ文）

出土した土器の内、外面にスタンプ文など装飾を施したものは、B地区の溝3から出土した器台に範圍文の間に竹管文が3個体とも描かれている。また破片のため全体像は不明だが同心円文ないしはS字状の渦巻き文が器台に描かれているものがある。その他、上器棺8の壺（甕）の胴部には鳥を表現したと思われるスタンプ文が三角形の範圍文と共に配されている。津山市内出土のスタンプ文についてはすでに分類がなされており、特にS字の渦巻き文は線の施し方で1種類に分類される（註34）。本例に近いものとしては京免遺跡（註34）に見られる。また、線の施し方は異なるがS字渦巻き文は下道山遺跡（註34）、アモウラ遺跡（註34）などで見られる。これらはいずれも土塚墓群からの出土であり、その意味からこれらスタンプ文を施した土器は、祭祀用の特殊なものであった事が考えられる。また、鳥のスタンプ文の復元図は第46図に載せている。鳥として表現しているのは渦巻き状の頭と一体化した胴体と足である。鳥のスタンプ文の類例は県内では6例（註35）知られており、その内表現的には中央町三明寺遺跡の例（註36）がくちばしの形態がはっきりしている以外は良く似ている。ただほとんどが器台に施しているのに対して、本例は土器棺の壺（甕）の胴部である点はやや特殊である。また、時期的には後期の全般に見られ、山陰地方のスタンプ文との系譜が注目される（註35）。

#### (4) 近世墓について

近世墓として16基検出した。ほぼ $7 \times 4.5\text{m}$ 四方に整然と造られている。掘り方は円形ないしは梢円形のもの11基、方形ないしは長方形のもの4基である。棺桶の痕跡を確認したものはほとんどないが、ほぼこれら掘り方の形態が梢円の形態と考えられる。なかでも特徴的なのは、長方形の掘り方の中に2基の棺桶を入れている例がある（近世墓14・15）事である。さらに、お互いがさほど切り合っていない事から上部に墓石などの標識が存在していたものと推測される。また、釘が内部から複数、多いものは110本以上出土しているものがある。これら釘は浮いた状態のものが多く、50本以上出土しているのは長方（方）形の掘り方のもので、棺桶の接合に使用されたものと推測される。ただ、近世墓7は円形の掘り方で50本以上の釘が出土している事から内部には方形の棺桶が入れられていた可能性が大きい。また、副葬品としては、煙管、鍼、鏡、毛抜、錢貨がある。煙管は7基、鍼は5基ありいずれも単品で両者が副葬されているのが5基ある。また、鏡を副葬しているものにはこの両者は含まれていない。この副葬品の違いに埋葬された人物の性別が反映されている可能性が指摘できる。また、錢貨は14基から出土し、4枚から多いもので21枚があり、5～6枚が多いようである。通常これら錢貨は六道錢と呼ばれ6枚が一般的であるが、本遺跡で6枚は4基のみで、数にはかなりばらつきがある。寛永通寶がほとんどであるが、中には波来錢（永樂通寶、天慶元寶、宋通元寶）も少數含まれている。また、寛永通寶は、古寛永、文錢、新寛永などに時期によって分類されるが、ほとんど新寛永を含んでおり、新寛永の初鋳が1697年（註37）である事から、これら近世墓の時期は新寛永初鋳以降のものと推測される。また、鉄銭が出土しており、いずれも銘により読み取れないものが多いが寛永通寶と考えられ、これの初鋳が1739年（註37）である事から、少なくとも近世墓4・9・11・13～15は1739年以降のものと推測される。なお、個々の時期の詳細については土器も無く明瞭でない。近世墓は、流通センター内では、男戸嶋遺跡、荒神崎遺跡で見つかっている。

#### 2. 上遠戸嶋遺跡の時期について

丘陵全面に確認調査のトレンチを入れ、なおかつ遺構の存在する斜面は全面表土を削いだものの、北側に面した斜面に住居跡1軒を検出したのみである。そのためどのような集落構成をしていたのかは明瞭でない。ただ周辺には谷を挟んだ丘陵に鏡野町が調査した葡萄田頭遺跡があり、上器の実見はしていないが、弥生時代中期から後期の集落遺跡との事である。それ以外には周辺に集落遺跡は存在せず、この住居の性格については明瞭でない。出土した遺物の中に、砥石、石斧、石包丁、石錐など石製品が揃っているのが特徴である。

次に出土した土器から時期を考えてみると、第107図1の壺は津山市ビシャコ谷遺跡（註5）に類似が見られ、他の器種の特徴から弥生時代中期後半頃の所産である。このように、流通センター内で中期の集落が確認されているのは、先の葡萄田頭遺跡と男戸嶋遺跡があるくらいである。

#### 3. 男戸嶋古墳について

##### (1) 墳丘について

本墳は直径15.5m程の円墳で、丘陵の最高所に築かれている。そのため明瞭な周溝は存在しないが西側と南東側の丘陵切断部分のみ溝状を呈している。墳丘の構築は、地山を整形して墓域を整えた後、旧表土の上に盛土を行っている。その盛土も基本的には1層で、北側のみ互層により丹念に構築している。埋葬施設はこの盛土を掘り込んで造られ、ほぼ中央に木棺1基を検出したのみで、その他の埋葬施設は存在しない。木棺は両小口に粘土の塊があり、断面が台形で内側が緩やかにカーブしている事から、内

部に存在していた木棺の形態をある程度推測することができる。その場合、底面が平らで両小口がややカーブする様から見れば船の形をした木棺と推測される。ただ、そのような木棺の場合どのような構造であったかは推測の域を脱しない。

#### (2) 副葬品について

副葬品としては、刀2、鉄鎌2束などがあり、刀はやや段をつけて平行に置かれその中に鉄鎌が置かれていた。この鉄鎌の切先が彫っている状態から刺に入れられていたものと推測できる。2束はそれぞれ有茎平根式1~2本と長頸式11~13本で構成され、その他束となっていなかったものが、有茎平根式4本、長頸式6本あり、総数は前者7本、後者およそ28本である。この有茎平根式の類例は絶社市隨庵古墳(註38)から出土している。この古墳は全長40mの帆立貝形の古墳で、豊穴式石室と木棺の2基の埋葬施設があり、副葬品として鏡や刀、剣、甲冑などの武具、鑿、斧などの工具、馬具、玉類など多数出土している。時期的には5世紀中頃と考えられる。また、鉄鎌の研究(註39)ではこれら長頸式の出現は5世紀前半とされる。また、本墳のように刀2本を副葬する古墳としては北房町大木1号墳(註40)があり、直徑9m程の円墳で、出土した上器から5世紀中頃のものである。

また、本墳に伴うものと考えられる上器が壇丘外から出土し、内部には赤色顔料の入った土師器壺があり、高杯で蓋をしていた。内部の赤色顔料は分析の結果、ベンガラであった。ただ埋葬施設の内部の東小口側(頭部側)からも散在的に赤色顔料の分布が見られ、これも分析したが、これには水銀が少量ながら含まれていた(註41)。この事から埋葬施設に塗られたものと壺に埋納されたものが同一の赤色顔料でなかった可能性が指摘でき、2種類(朱とベンガラ)を塗り分けている可能性も指摘できる。

#### (3) 時期について

鉄鎌は隨庵古墳に類例が見られ、この古墳は5世紀中頃の古墳と考えられ、長頸式の鉄鎌の出現が5世紀前半からすると、ほぼこれに近い時期と考えられる。次に出土した土器から時期を推測してみたい。出土した土器は十師器で須恵器は1点も含まれていない。出土した十師器は壺と高杯である。壺は球形に近い胴部で口縁部はくの字に外反し縁部は丸く仕上げている。表面剥離のため外面の調整は不明だが内面はハラケズリを施している。壺はなかなか特徴はつかみにくく、類例の比較は難しい。そのため高杯で検討する事とする。高杯は杯部のみで口縁部はくの字に屈曲し縁部付近がやや外反する形態である。同様な高杯は津市西吉田北1号墳(註42)に類例が見られ、出土した須恵器は田辺編年(註43)のTK216型式併行でおおよそ5世紀中頃である。同様な高杯は津市河辺上原2号墳第2主体(註44)にも見られるが、杯の屈曲部の張りがなくやや後出するものと見られ、これは出土した須恵器からTK47型式併行でおおよそ6世紀初頭である。

以上、鉄鎌と土師器の比較検討から時期を推測すれば、鉄鎌からは5世紀前半~中頃、土師器からは5世紀中頃が考えられ、おおよそ5世紀中頃が所属時期と考えられる。

#### (4) 古墳の性格について

本古墳の周辺には、やや時期の異なる前期古墳が見られる。有本古墳群(註10)や田邑丸山古墳群(註45)がそれである。前者は方墳で構成され、後者は前方後方墳と円墳で構成される。ただ後者は現状で5基の古墳であるが、本来は8基以上の古墳からなり、少なくとも3基はすでに消滅している。その事から考えると、この中に本墳と同一時期のものが含まれていた可能性は捨て切れない。

また、本墳は立地を見ても丘陵の最高所に単独で存在し、古墳からの展望は良く南側に平野部を見渡すことができる。古墳の規模は直徑15.5mとさほど大きくはなく、埋葬施設としては木棺1基が中央に

存在する。木棺は両小口に粘土を使用するなど比較的丁寧に造られている。先の有本古墳群でも床面に粘土を敷く例は存在したが両小口に置く例はめずらしい。両小口に粘土と石をかためて置く例は、津山市門の山9分墳（註46）に見られるが、時期的には新しい。またこれら小規模の古墳にもかかわらず副葬品に刀2振りと鉄鎌が30本以上出土し、鉄鎌はその出土状況から初に入れていたものと考えられる。この時期の類例が少ないため比較検討は難しいが、少し時代は新しいTK23～47型式の須恵器をもつ古墳（例えば津山市長畠山北古墳群、註47）でさえ、武器に関して言えばこれだけ多量の副葬品は知られていない。そのためこれら武器の多さと武器のみの副葬から推測すれば、この被葬者は軍事面の統率者であった可能性が指摘できる。また、ちなみにこの時期（5世紀中頃）は先の西吉田北1号墳のように方墳が築かれている事が多い。これら方墳はさらに下位に属した人物の墓で、特に西吉田北1号墳からは鍛冶具が出土しており、この被葬者は鉄製品をつくる技術者と推測される。さらに地城は違うが前述した絶社市隨庵古墳はほぼ同時期の古墳で規模や墳形からすれば、本墳のような統率者をさらに統率していた人物の墓であろう。本墳のような類例が各地に存在するとなれば、その事の傍証となり、本例は当時の政治的背景を考える良好な資料となる。

- （註1）行田裕美他「大畠遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集』津山市教育委員会1993  
（註2）木村祐子他「小原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』津山市教育委員会1991  
（註3）藤田憲司「山陰「鰐尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌第64巻第4号』日本考古学会1979  
（註4）中山俊紀他「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会1981  
（註5）行田裕美「ビシャコ谷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集』津山市教育委員会1984  
（註6）津山総合流通センター建設に伴い平成8年発掘調査、報告書は平成10年度刊行予定。  
（註7）小郷利幸「三毛ヶ池遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集』津山市教育委員会1993  
（註8）正岡豊太郎「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会1977  
（註9）山藤康平他「中山遺跡」落合町教育委員会1978  
（註10）小郷利幸「有本古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集』津山市教育委員会1997  
（註11）大橋雅也「器台形土器」「吉備の考古学的研究（上）」山陽新聞社1992  
（註12）栗野克巳他「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会1977  
（註13）中山俊紀「才ノ脇遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』津山市教育委員会1985  
（註14）椿真治他「みそのお遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87』岡山県教育委員会1993  
（註15）尾上光規他「中池ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告108』岡山県教育委員会1996  
（註16）近藤義郎・泰成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究第13巻第3号』考古学研究会1967  
（註17）宇垣匠雅「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究第27巻第4号』考古学研究会1981  
　宇垣匠雅「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究（上）』山陽新聞社1992  
（註18）神原英朗「便木山遺跡発掘調査報告」山陽町教育委員会1971  
（註19）山藤康平他「西山遺跡」真備町教育委員会1979  
（註20）小林利晴「特殊器台と特殊壺のセット関係」『古代吉備第19集』古代吉備研究会1997  
（註21）河本清「津山市丸山遺跡発見の遺物」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会1975  
（註22）近藤義郎「上原遺跡」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986  
（註23）御船恭平「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究21・22合併号』古代学研究会1959  
（註24）1976年津山市教育委員会が発掘調査、報告書未刊。  
（註25）分析は、奈良国立文化財研究所の肥塙降保氏にお願いした。分析に際し倉敷市埋蔵文化財センター綾野早苗氏に便宜を図っていただいた。また、A地区住居跡4やB地区土塹墓12のガラス製小玉の成分はカリシリカガラスである。  
（註26）京都大学大学院生小暮律子氏に資料提供及びご教示を得た。  
（註27）藤田等「弥生時代ガラスの研究」名著出版1994  
（註28）平川誠「紙子谷遺跡」『定型化する古墳以前の墓制第1分冊』埋蔵文化財研究会1988  
（註29）常盤井智行他「月後大山古墳群」『京都府丹後町文化財調査報告第1集』丹後町教育委員会1983

- (註30)県南での出土例は2例あり、その内技術的に同じなのは倉敷市向本見遺跡の例がある。総社市教育委員会高橋進一氏にご教示を得た。高橋進一「玉作遺跡と玉製品」『吉備の考古学的研究(下)』山陽新聞社1992
- (註31)ガラス玉の分析結果については綾野早苗氏に資料提供及びご教示を得た。
- (註32)大村直「弥生時代における鉄器の変遷とその評価」『考古学研究第30巻第3号』考古学研究会1983
- (註33)川越哲志「弥生時代の鉄器文化」雄山閣1993
- (註34)野上恭子「津山のスタンプ文」『年報津山弥生の里第1号』津山弥生の里文化財センター1994
- (註35)河本清「絵画土器・人形・鳥形スタンプ文土器」『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社1992
- (註36)名越勉・甲斐忠彦「スタンプ施文土器の新例」『考古学報58巻第4号』日本考古学会1973
- (註37)水井久美男「日本出土鉄器総覧1996年版」兵庫埋蔵鉄調査会1996
- (註38)鎌木義昌他「隨塗古墳」総社市教育委員会1965
- (註39)尾上元規「古墳時代鉄器の地域性」『考古学研究第40巻第1号』考古学研究会1993  
鉄器については尾上元規氏にご教示を得た。
- (註40)江見正己他「大木古墳群他」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113』岡山県教育委員会1996
- (註41)白石純「有本古墳群・男戸鶴古墳出土の赤色顔料について」『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集 津山市教育委員会1997
- (註42)坂木心平他「西吉川北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集』津山市教育委員会1997
- (註43)川辺則三「須恵器大成」角川書店1981
- (註44)小郷利幸「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』津山市教育委員会1994
- (註45)津山市教育委員会が1997年に津山総合流通センター建設に伴い確認調査。報告書未刊
- (註46)小郷利幸「門の山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集』津山市教育委員会1992
- (註47)行田裕美他「長歛山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会1992

# 図版





1. 有本遺跡遠景



2. 有本遺跡遠景



3. 有本遺跡全景



1. 有本遺跡 A 地区全景



2. 住居跡 1 作業風景



3. 住居跡 1



1. 住居跡 1 遺物  
出土状況



2. 住居跡 2



3. 住居跡 2 (調査後)



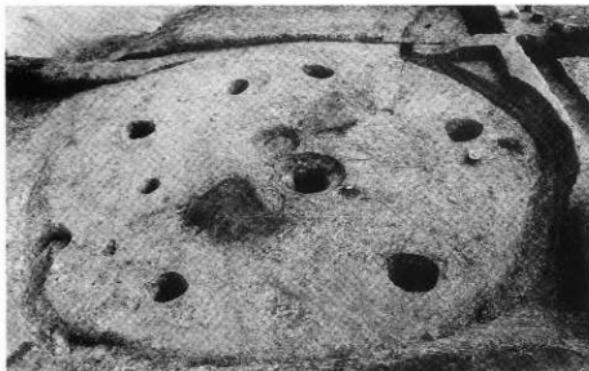
1. 住居跡 3 検出状況



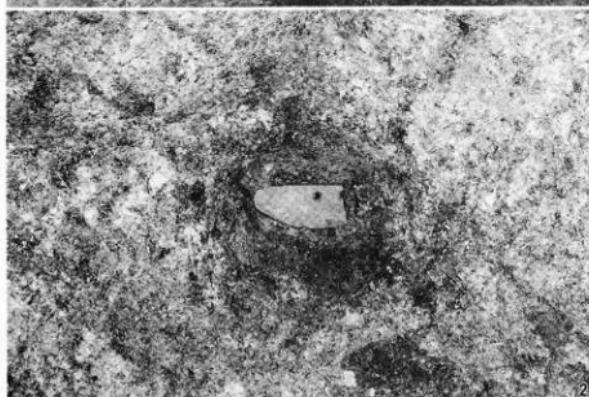
2. 住居跡 3



3. 住居跡 4 調査風景



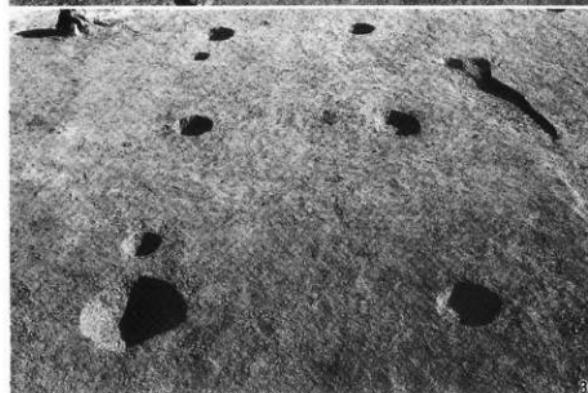
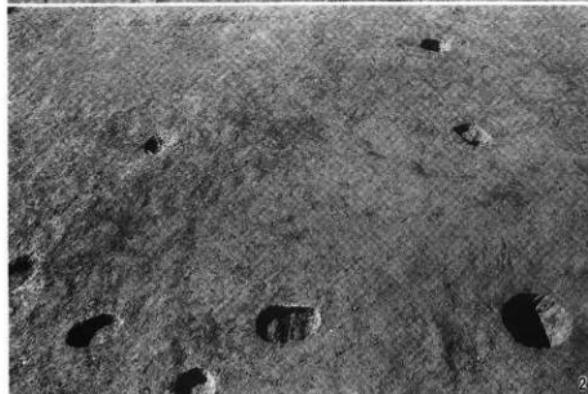
1. 住居跡 4

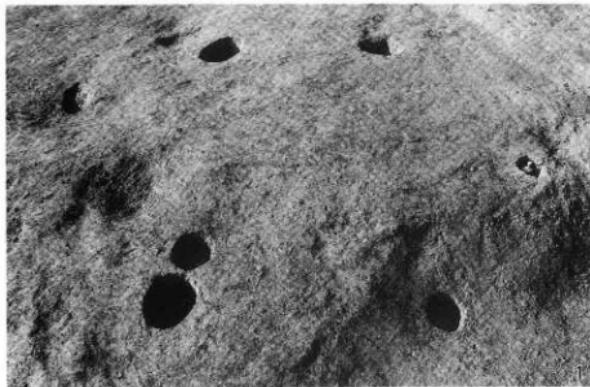


2. 住居跡 4 遺物  
出土状況

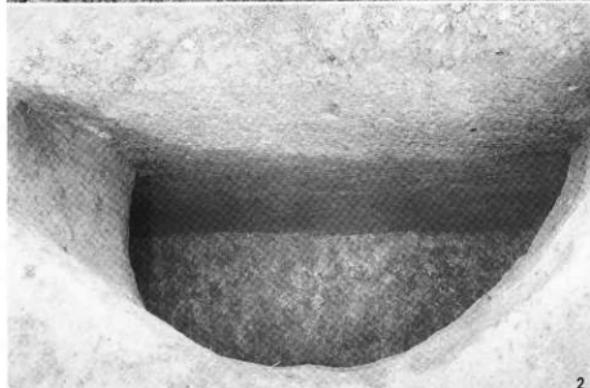


3. 遺物跡 1





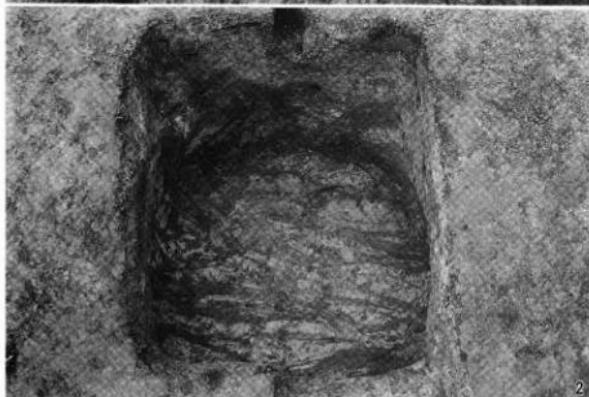
1. 遺物跡 5

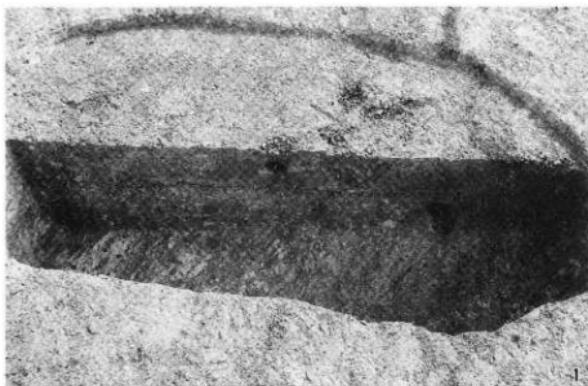


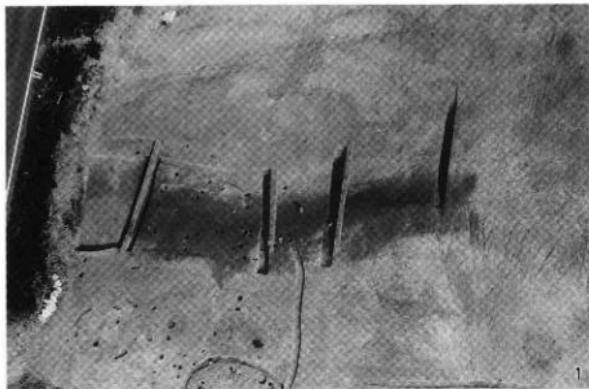
2. 土壠 1 土層

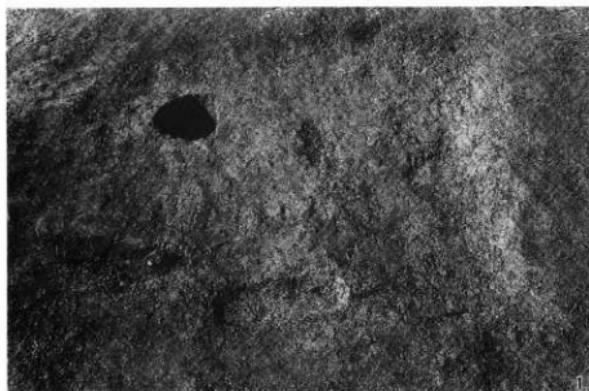


3. 土壠 1 遺物  
出土状況

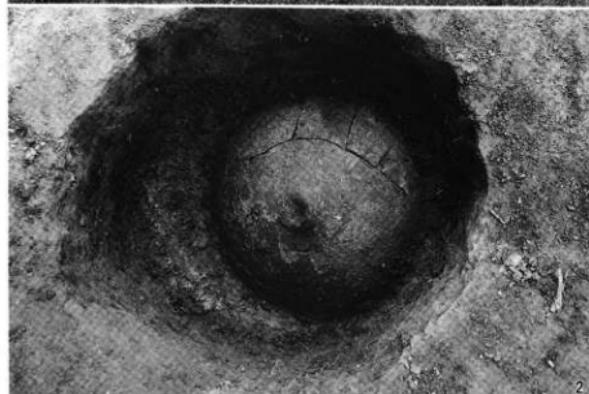




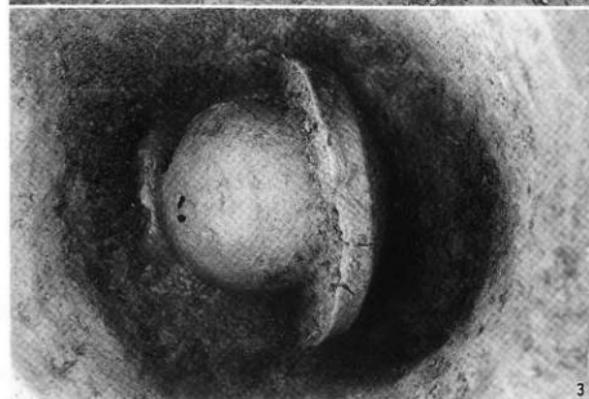




1.段状造構 2



2.柱穴 1



3.柱穴 2



1. 有本遺跡B地区  
遠景



2. 有本遺跡B地区  
遠景



3. 有本遺跡B地区  
全景



1. 区画墓1 全景



2. 区画墓1 列石  
(北から)



3. 区画墓1 列石  
(南西から)



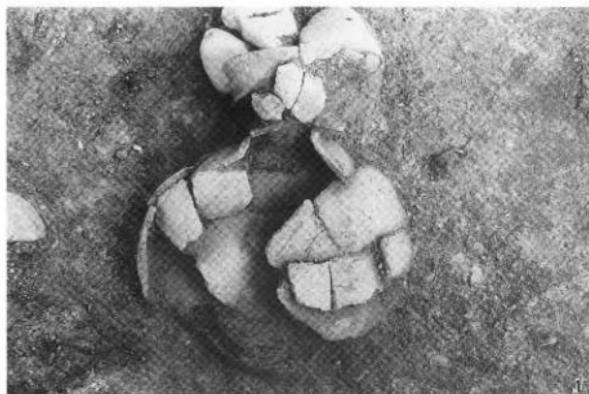
1.溝3全景



2.溝3遺物  
出土状況(1)



3.溝3遺物  
出土状況(2)



1.土器棺 6 検出状況



2.土器棺 6



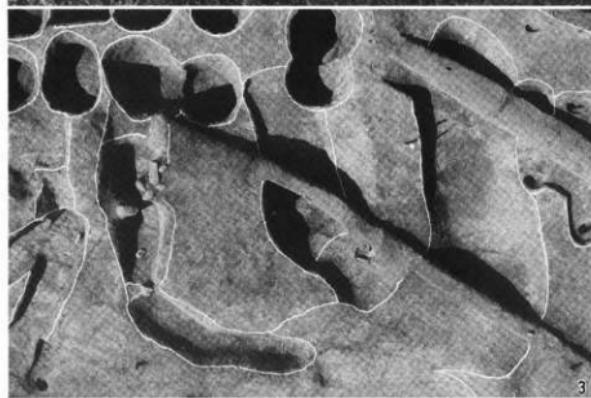
3.土器棺 5



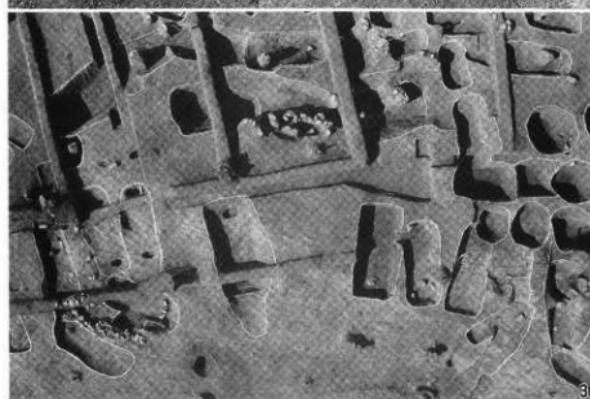
1. 区面墓1 土塘墓群

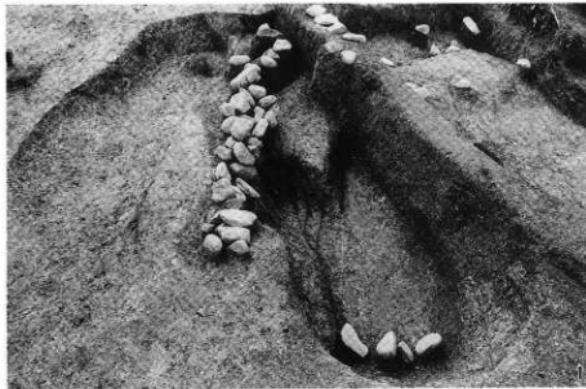


2. 土塘墓49遗物  
出土状况



3. 区面墓2 全景





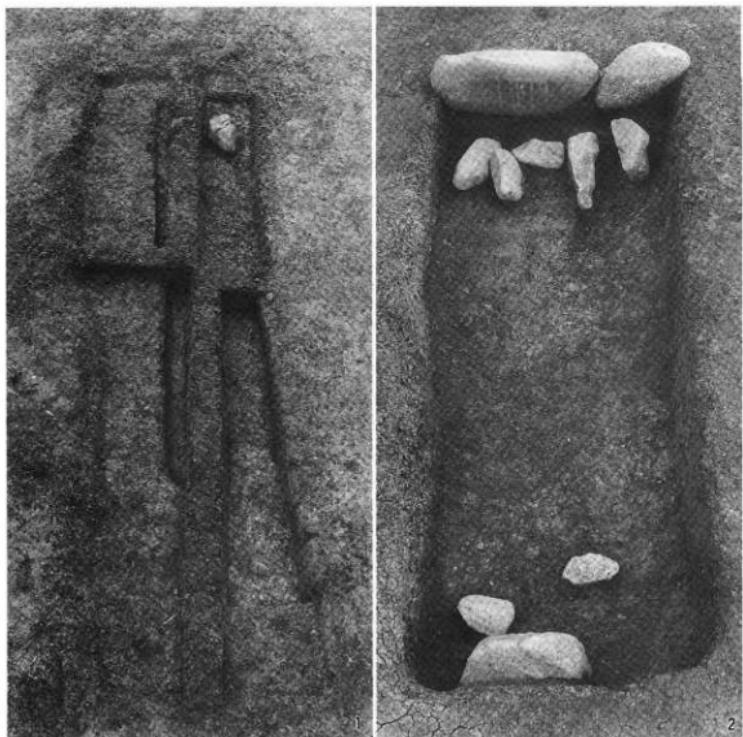
1. 区画墓 3列石及び  
溝 6



2. 土壙墓86土層



3. 土壙墓84・85



1.A群土壙墓1

2.土壙墓2



3.土壙墓2枕石



1 . B群全景



2 . 土壙墓21



3 . 土壙墓17



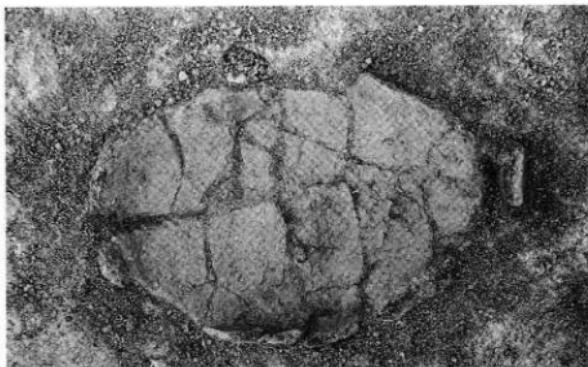
1. 土墳墓17枕石



2. C群作業風景

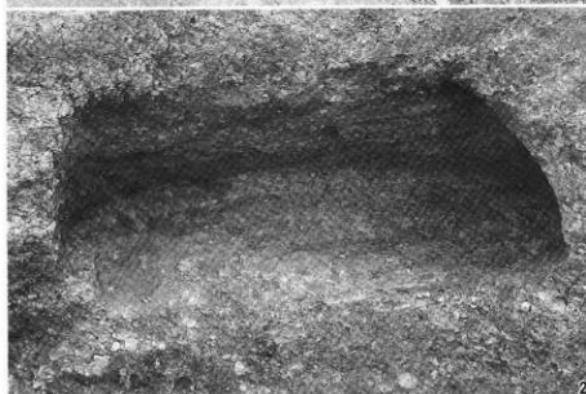


3. 土器棺 2





1. 土壌基71



2. 土壌基71壁側の  
振りこみ



3. F群全景



1. 土器棺 9



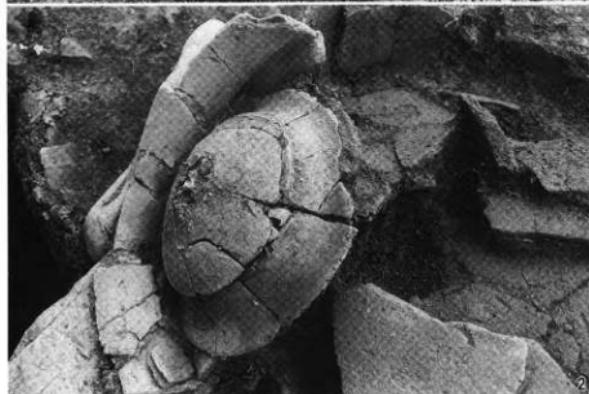
2. G・H群全景



3. H群土壙墓134



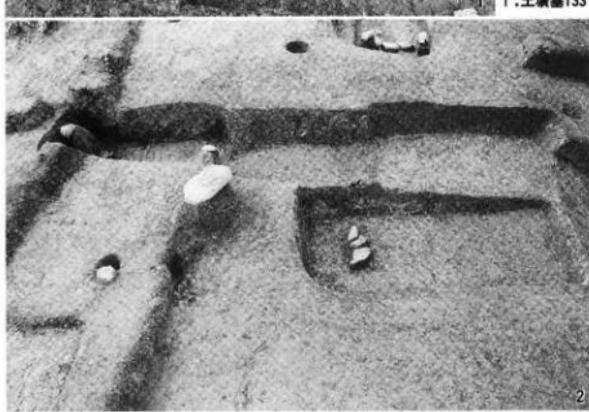
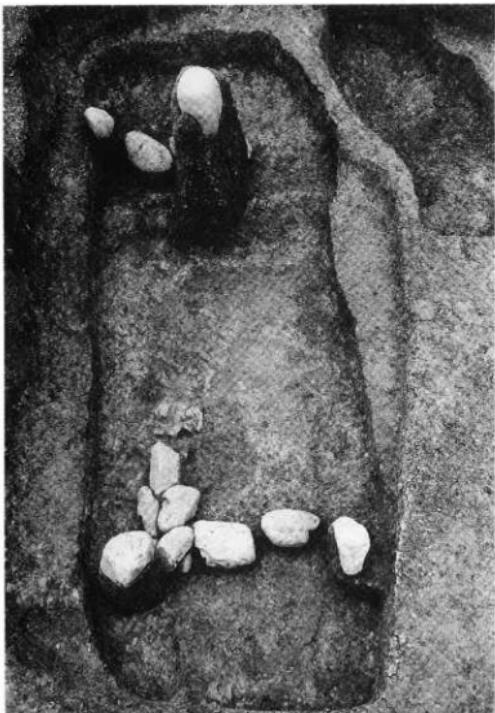
1. 土器棺10検出状況



2. 土器棺10(部分)



3. 土器棺10内部状況





1.1群全景



2.段状堆积1·2土层



3.土器棺11檢出狀況



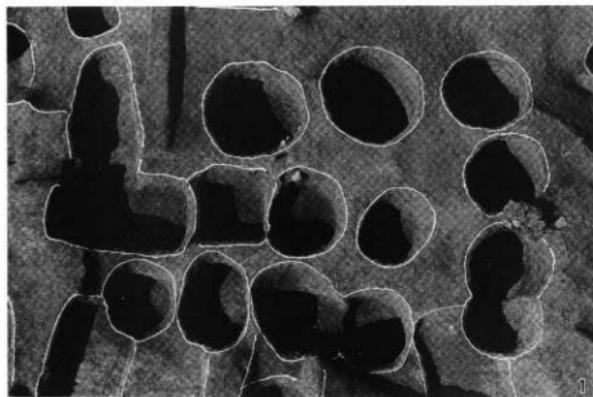
1. 土器棺11内部状況



2. 土器棺11調査後



3. 土器棺11調査風景



1. 近世墓全景



2. 土壙1



3. 溝9